

巨樹・巨木シリーズ30 岐阜県-4

細田木材工業株式会社
顧問 細田安治

新年に入り早速2月号。忙しいが楽しい巨樹・巨木シリーズは、今号で30号を数える。が、まだまだ途半ば。探訪者U氏が提供してくれた資料は膨大で未だ二合目ぐらいか。

ご存じ本年の干支は、丙午(ひのえうま)、干支の組み合わせの43番目にあたり、十干の「丙(ひのえ)」と十二支の「午(うま)」が組み合わさった年のこと。「丙」と「午」どちらも火の性質を持つことから、丙午は火の力を象徴する年とされており、^{かんば}悍馬の如く力強く、そして読者の皆様に楽しんでいただけるよう、続けていきたいと存じます。お付き合いのほどをよろしくお願い申し上げます。

さて、岐阜県は味わい深く、興味をそそられる巨樹がまだ残っており、岐阜県4回目となるが、ご紹介を続ける。

写真番号-1 樹番号33 六社神社のムクノキ

樹齢300年以上、樹周7m、樹高25.5m 養老郡養老町竜泉寺 岐阜県指定天然記念物

*一部岐阜県ホームページより。

養老町竜泉寺の六社神社境内にこのムクノキがある。根元の幹周囲10.2m、目通り幹周囲7.0m、樹高25.5m、枝張り東16m、西10m、南13m、北18mの巨樹で樹勢は旺盛である。

＜筆者のつぶやき＞

やせ細ってはいるが毅然としての立ち姿は、他人を寄せ付けない、近寄りがたい厳しさがひしひしと伝わってくる。余分なものをそぎ落とし枯れた仙人のような趣のある木である。養老町の巨木の一つとして地域に根ざした存在で、神社とともに大切にされている。

このムクノキは樹齢300年以上で本シリーズの古木の中では比較的若い方だが、枝張りが東西南北に大きく張り出し10m～20m弱まで広がっており、この部位だけ見れば、人工的に造形された「這い松」をも凌駕しそうな迫力をもつ枝張りともいえる。

*以下はネットの情報を参照して。

この六社神社のムクノキの所在地は「養老町竜泉寺」。お寺の中に神社があるのかと不思議に思い、調べてみた。すると、この竜泉寺とは、単なる地名や寺の名前ではないことがわ

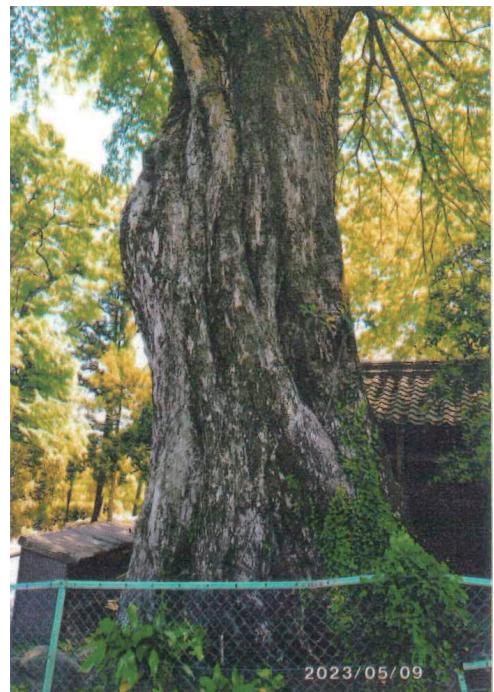


写真1 六社神社のムクノキ

かった。この竜泉寺がある辺りは古墳の石材が残り、土器が出土するほどの歴史ある地域。中世期には山岳信仰の対象となり、寺院の遺跡もみられる。「竜泉寺廃寺跡」として、散歩コースもあるという。

写真番号-2 樹番号 9 7本サワラ

樹齢700年、樹周9.1m、樹高43m 岐阜県大野郡朝日町甲

岐阜県指定天然記念物

*岐阜県ホームページより抜粋。

高山市甲地区旧国道沿いの塚の上に、このサワラが聳え立つ。根元の幹周囲9.1m、根元から数mで6幹に分かれ、それぞれの1幹周囲約1.2m、樹高43mの巨樹である。伝承では伏見天皇の頃、甲村に文作という者(現永瀬氏の祖先)が、剣道を志し諸国修行、永仁元年(1293)行方不明となっていたが、仏道に入り高野山で釈常栄の法号をうけ66ヶ国を遍歴した後、郷に帰り乾元元年(1302)に大往生を遂げた。子は七男あり長男が父の遺骸と経書をここに埋め、7人兄弟であったので6本のサワラの苗とサクラ1本をここに植えたのが今日の7本サワラであり、このうち、サクラは枯れてサワラの6幹となったといわれている。

＜筆者のつぶやき＞

7本サワラというから、サワラが7本林立しているのかと思っていた。ところが、写真を見るとそうではなく、幹が6つに分かれたサワラだとわかった。由来を知って納得したが、疑問は残った。7本サワラはサクラ1本が枯れて6本になったのだから、「6本サワラ」ということでよいのではないか。7本サワラのそばにたつ石塔にも同じような説明が彫り込まれてある。

写真番号-3 樹番号19 荘川ザクラ

樹齢450年、樹周 6 m、樹高20m 高山市荘川町中野 岐阜県指定天然記念物

もともとこの2本のサクラは、ダム建設により水没することになる寺、光輪寺にあった。

このサクラは、ダム建設会社トップの高崎達之助が、このサクラを見てなんとしても残したいと力を尽くして移植し、見事に根付き、樹齢を重ねている、という歴史をもつ。

この巨樹ザクラの根元には石碑が設置されている。

*岐阜県ホームページより抜粋。

・故高崎達之助翁と荘川桜

かつて高崎翁が光輪寺に老桜を訪ねたとき、慈愛に満ちた口調で語った言葉は、その時翁に従っていた者にいつまでも深い感動を与えた。

「進歩の名のもとに古き姿は次第に失われてきたが、人の力で救えるものは、何とかしてのこしていくたい。古きものは古きがゆえに尊いのである。」

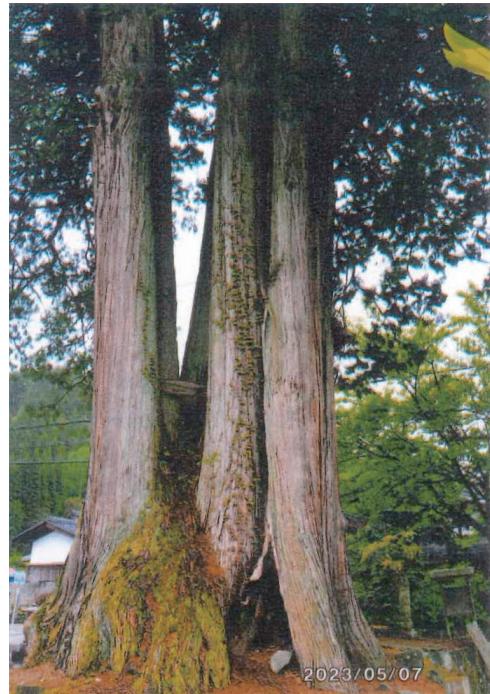


写真2 7本サワラ



写真3 庄川ザクラ

平成14年10月 庄川村 商工会 青年部 高崎達之助

ここで高崎達之助氏のダム建設に至るまでのいきさつ、庄川サクラの移植のエピソードを高崎氏への畏敬の念を込めて、少々長いがご紹介する。

• 御母衣に水源ダム建設

戦後の産業を復活させるため電力供給という国家的な使命を担いJ-POWER(電源開発会社)が設立され、初代総裁に高崎達之助が就任した。仕事は岐阜県の高山市の庄川村の庄川上流に水源地をつくることから始まった。

当時水没予定地区の大部分を占める庄川村地域には1200人以上の住民がいた。174戸の住民により「御母衣ダム絶対反対期成同盟死守会」が結成され、猛烈な反対運動が繰り広げられていた。

高崎達之助は真摯に住民との対話を続け、6年余にも及ぶ話し合いの末、両者が歩み寄るかたちで合意、死守会は解散に至った。解散式には高崎は村民らと万感こもる握手を交わしたという。

• 高崎総裁の気づきと英断

式終了後、高崎は「周囲を見てみたい」と水没予定地をゆっくりと歩き、光輪寺の境内に来たとき、樹齢400年余の大きな古サクラをみつけた。

• 高崎総裁の回想

私の脳裡には、この古桜が湖底に、淋しきに動いている姿がはっきりと見えた。

私はこの桜を、「このまま放置でよいのか、なんとか救いたい」「救える手だけではないのか」この気持ちが胸の奥の奥から突き上げてくるのを抑えることができなかったという。

• 移植しよう

高崎は「移植しよう」を決意したが、これほどの大樹、しかも年を経た老サクラの移植は植木の世界にも例がないほど困難。無謀とも言える計画として植木の世界からもすぐに「我が」、と手を上げる協力者

が出てこなかった。

しかし、サクラの移植を諦めない高崎は、遂に「桜博士」と呼ばれる笹部新太郎に出会った。笹部は最初は断ったが高崎の熱意に感動し協力を約束する。

さらには、当時日本一と言われた植木職人の丹羽政光の協力を得たのである。

高崎達之助の「人間の進歩で自然を壊すが、再び人間の手で自然をとりもどそう」とした自然に対する尊敬の念と、いったん決めたことは最後まで諦めない、この精神が世界初の桜移植事業をスタートさせた。

・移植への挑戦

1958年(昭和33年)11月、前例のない奇跡の移植に向け、かつてない挑戦が始まった。

ここで移植する桜とはどんなものか、改めて見てみよう。

樹高50メートル、本数2本、移動距離600m。

2本の老サクラを同時に動かし移植する。サクラは外傷にとても弱い樹木である。大きな枝を切るか。
「切らねば運べぬ」という丹羽、「むやみに切るな」の笹部

などなど意見の対立もみられた。議論の末に必要最低限を残して枝と根は打ち落とされた。サクラはむしろ巻かれ、クレーンで鋼鉄のソリの上に乗せられ、ブルドーザー3台で引きずり上げられた。

・移植成功

高崎達之助、笹部新太郎、丹羽政光この三者の強い意志が統一され、知恵や工夫、行動力、など様々な思いが交錯しながら、そしてなんとしても移植を成功させようとする強い気持ちが運を引き寄せたのであろうか。この難工事は難作業をことごとく乗り越え、1960年(昭和35年)12月24日、世紀の移植工事が完了したのである。

次の心配はこの老サクラが厳しい冬を乗り越えてくれるかどうかであり、それは翌年の遅い春まで待たなくてはならなかった。そして翌春、待ちに待った2本の老桜は活着した。世界でも例を見ない快挙と言われている。

水没記念碑の除幕式で高崎は、未だ葉を見せず丸裸の桜を見上げ、次のような和歌を詠み心境を吐露した。

ふるさとは

湖底(みなそこ)となりつ

移し来し

この老桜

咲けとこしへに

初代総裁・高崎が残した魂は今もなお引き継がれている。

<筆者のつぶやき>

「樹齢450年の老サクラの根を切り、枝も運べぬところは切り落とす」これは、移植の禁じ手を無視、一般常識をも捨てた暴挙としか思えない。しかし、成功したことは前例のない素晴らしい快挙だと万歳、拍手したいぐらいである。続く